優秀賞　中学生部門〈家族の絆〉

ポケット

西東京市立青嵐中学校 3年
三浦　七帆

母は自分の胸に手をあて、「ぎゅっ」と握ると、「大丈夫、大丈夫」と言い、私のポケットの中に、「ぽんっ」と手を入れた。

小学四年生の春、私は引っ越しのため、転校をした。その頃から、母も仕事を始めた。いつも家にいた母が、家にいない。いつも一緒だった友達もいない。通い慣れた学校じゃない。私には、新しい学校へ行くのが、不安でたまらなかった。毎朝登校する道は遠く、涙でにじんで、ぼんやりとしか見えなかった。母はそんな私を、毎朝学校の坂の下まで送ってくれた。

ある日の朝、「じゃあね。いってらっしゃい」と母が言うと、また涙があふれそうになった。すると母は、私に近寄り、自分の胸に手を当てた。その手を「ぎゅっ」と握り、私のポケットの中に入れた。

「大丈夫、大丈夫。涙が出そうになったらポケットの中に手を入れてみな。元気を入れておいたから」

私の目から、ためていた涙がこぼれ落ちた。私を元気づけてくれた母の目にも、涙が浮かんでいた。私も胸に手をあて、「ぎゅっ」と握った手を、母のコートのポケットに入れた。二人で笑った。

それからは、クラスのみんなや先生とも仲良くなり、楽しく過ごせた。短かったけど、一年でまた引っ越すことになり、転校をした。でも、自分自身に「大丈夫、大丈夫」と言い聞かせ、もう涙を流すことはなかった。

あの時の母の言葉と、にぎった手の中には

「大丈夫。きっと乗り越えられる。強くなるんだよ」

という母の思いが込められていたのだと、十五歳になった今、感じられるようになった。

「大丈夫、大丈夫」そして、ポケットの中にそっと手を入れる。

これが、私の生きぬく力だ。